繪本拾遺信長記

九

へ13
3564
9

門へ13
號3564
卷9

繪本拾遺信長記初篇巻之九

目録

信長再攝州發向之事

信長勅と蒙りて英雄書と切しむ

拾本寺幸天王寺の陣を設け給へ

寺幸寺計小田の軍兵と密謀うし

光秀軍議味方の勝と勝く

下辻村助討死之事

小田勢援亜八ヶ村乃田畑刈

大阪府立圖書館
昭34.6.3
藏書

下辻村助討死
本願寺領城南國事
朝倉景鏡怒を含く平泉寺へ走る
平泉寺焼
信長卿長島一揆退治之事
松の浦り合戦
信長歎て門徒の百姓と和と

繪本拾遺信長記初篇巻之九

信長再攻摂州發向之事

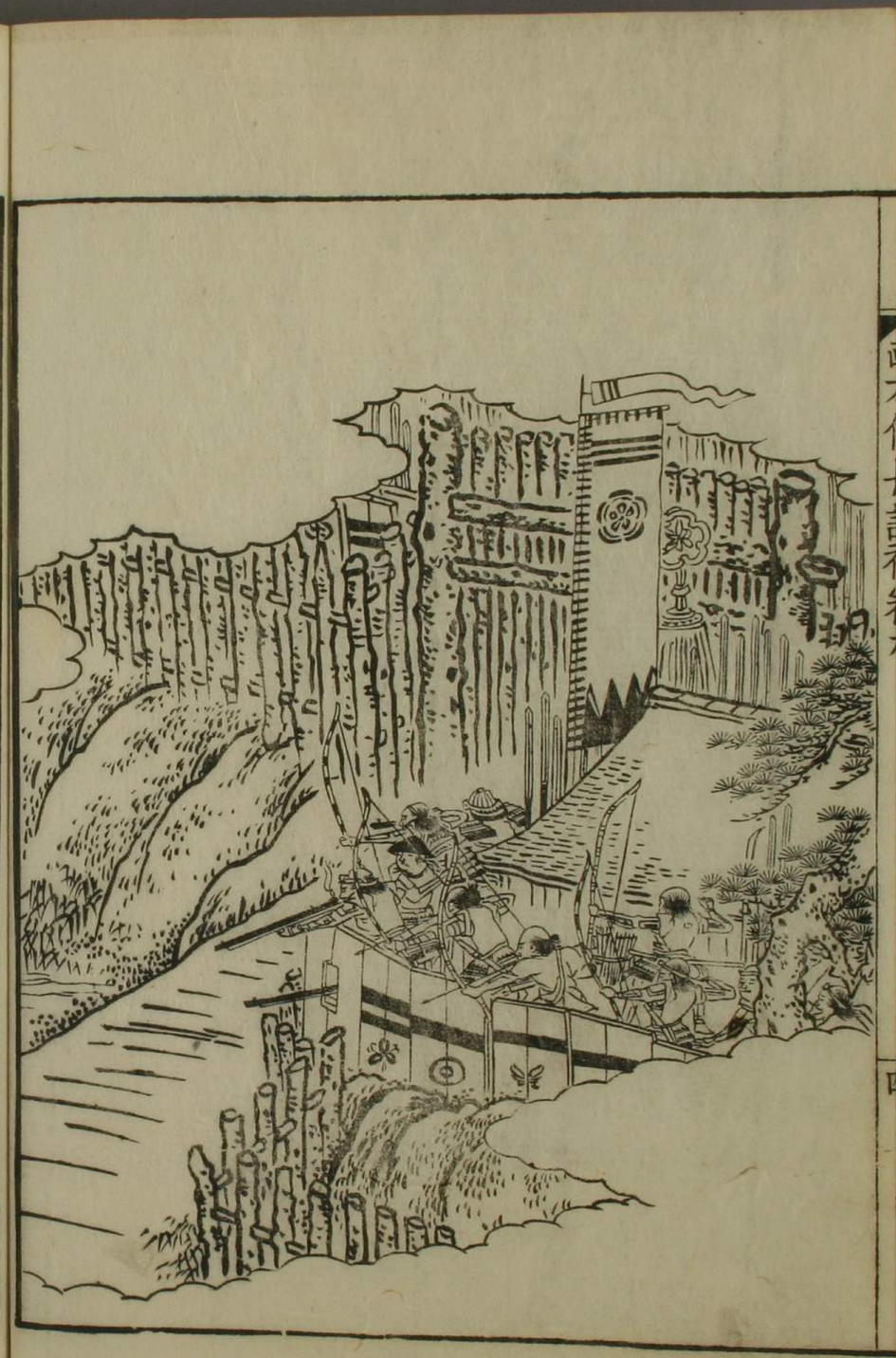
天正二年の春信長摂州發向の儀しみ〳〵しく然と其事を披露せ〳〵ど只何とゝ上洛ゝ〳〵せ不ゝ思ゝ寄せ押寄ん計略ゝゝ中へ〳〵る三月十二日彼阜を出立みく〳〵月十七日に洛せら之条門と遂落ゝ孫三十八日勅淀みく〳〵信長と後三條參議之叙位せ〳〵る数奉の軍功と孫し洛ゝ此時信長奏聞して東大寺の英勲畫と伐んゝを彫ゝ抑此名畫と申は聖武天皇り御宇唐朝の天子我國へ渡る而の畫本なる紙天皇此東大寺へ寄附し洛ゝ別ゝ号を蘭奢侍と號ゝ則東大寺の三宝を香名の中ゝ義て奉名と洛ゝ先ゝ東山慈照院義政之此

信長勅を蒙り
黄熟香
を
切
ら
む

太閤記 巻九
四三

香と不審をなす後日の沙汰し安へざりしを信長卿の奏聞
を遂るの勅許ありて同月廿六日内大納言輝資卿親名丹中
納言雅教卿と勅使として東大寺を訪ひ玉殿を開き蘭
奢侍と云ひ信長卿よりのまゝ紛として名久間右馬門射
柴田修理進庄又郎左衛門武井夕庵松井友閑出て四例の
まうせ一す八方を切立せ給ふ竟で小田家来代官の規模と信長
深く思を術せ給ふ爰より信長軍兵を引率し松永弾正少弼
久秀の居城多門の城を攻き暫く寄を懸給て同月三日儀を
諸方へ潮流し来る摂州の郡寺を押寄らる一ゝ松永弾正少
弼は右馬門佐筒井順慶芝谷多羅尾右近池田丹波守多久間右
馬門尉明智十兵衛等二万余人竜田城と称て奥郡の天王寺を

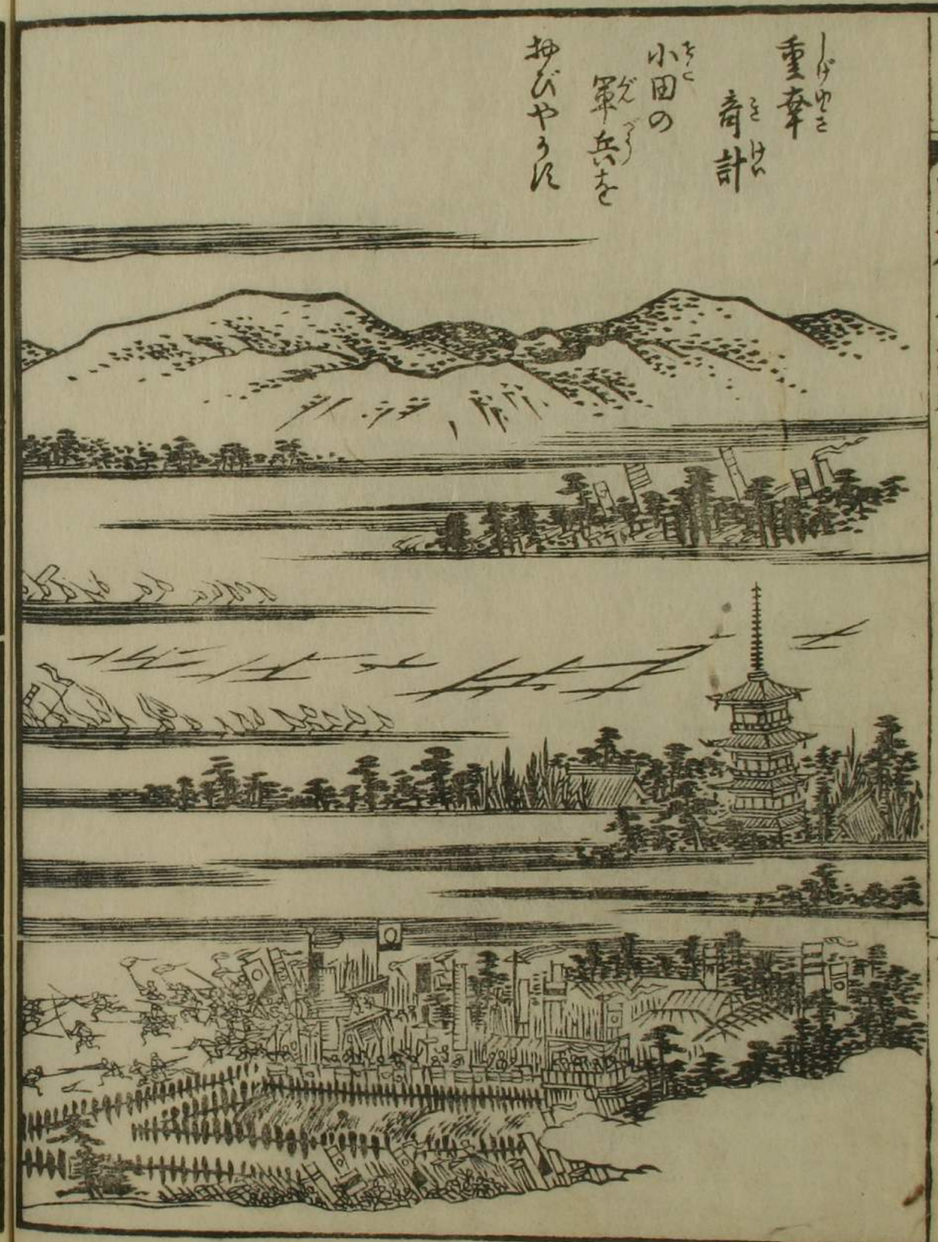
陣を布一ゝ荒木摂津守立る余人尼崎を出張し又一ゝ庄又郎
左衛門佐内藤左二万余人長柄堤より押出し柴田修理亮前三万
余人寄せ合せ陣し大将信長卿い旗本の軍二万余人住吉小坂陣を
据らを堅を擬を揃じ合せ仁方より奥寄る開の奥い山河を裏さ
人馬の足あい大地を動し殺しとも云ん計いなりしろ石山の城中
より無数の鉄砲を撃ぶ用を余る大軍を仁方を引受
矢玉の数い弓鉄砲を手側し柵際を進む敵を大石を落し大木
を投りけ寄を郷を裏く奥すれい寄中法を設めく陽ぎさ〳〵信長
の大軍十又日が間是歌間ゆく奥々れども元来石山要害を双の腸
地なる小軍師を率謀計をめぐらし下間法橋教龍甚なる奥の上を
よく軍法を達しぬるを諸〳〵手勢を加へ城い門を開いて切て出



拾本弟幸
天王寺乃
陣所を
落ス
南无天満大自在天神

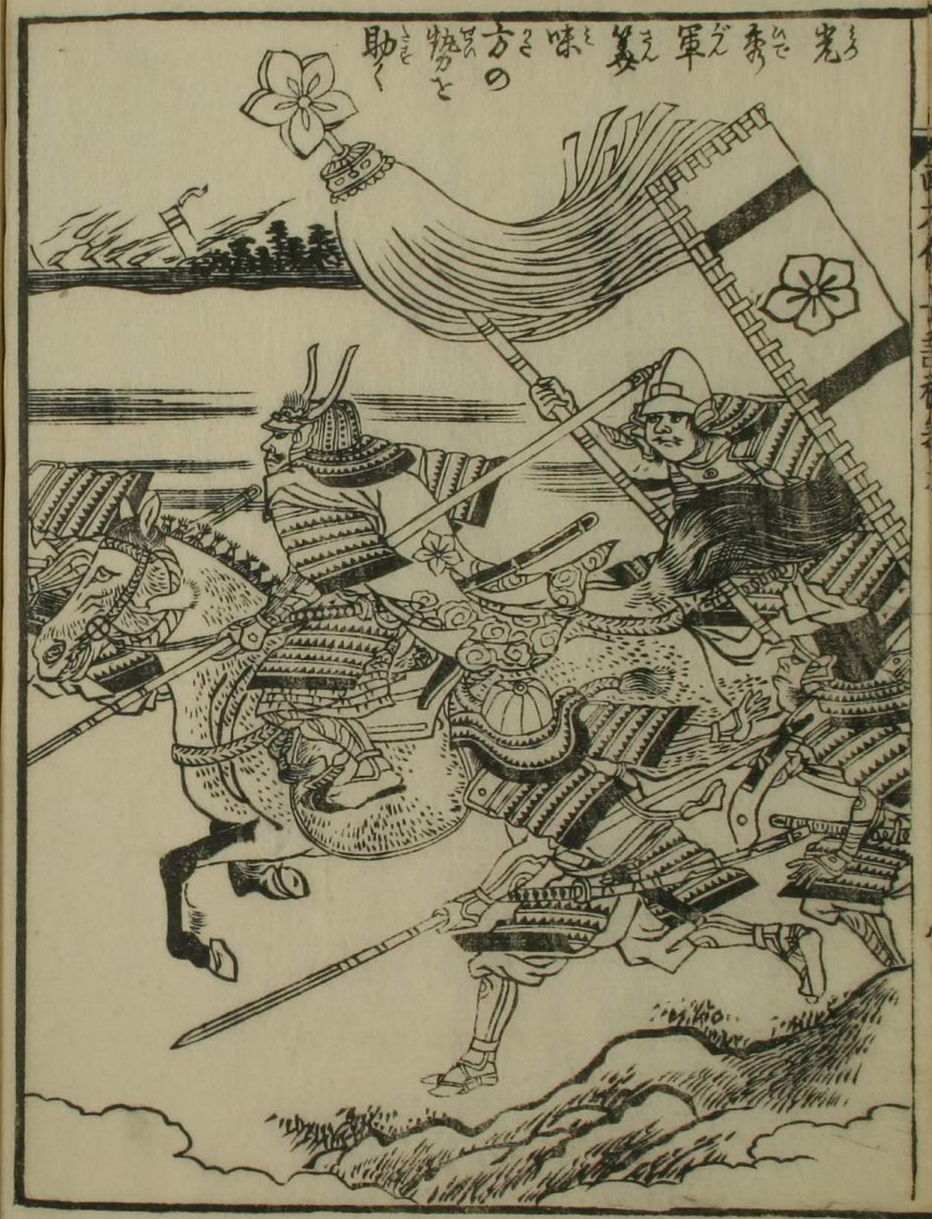
ろく引とく寺中ゝ籠ゝ武い大筒石火炮を放ちかけて敵ゝ多勢を
討殺ゝ爰万紀考を盡ゝ如を紛ひゝ御を習て戦ひゝ武い者
なの大軍合戦毎ゝ級軍功ゝ抜ゝ名ゝ見ゝ知ゝ人ゝ小川分に
横岸本渡雑波地田の砦ゝ討て出横槍を入後交対
うけ地蜂田の者ゝ武い者ゝ多ゝ武い者ゝ敗ゝ二見表に退けよゝく
めだうけゝやませゝ小田勢殆ゝ戦ひ敗ゝ二見表に退けよゝく
多ゝ人間右衛門い天王寺ゝ陣をゝ明智十兵衛ゝ行ゝ引退信長卿
ゝ本陣と堺ゝ強ゝ引ゝ軍士の疲を休めゝ給ゝ本
幸先と見ゝ大ゝ小笠ゝ軍ゝ練ゝ信長ゝ退座て遠く堺と
退きゝ出ゝ戦ゝ引ゝ兵を出ゝ信長をゝ小田の殿ゝ騒と
見ゝ出ゝ栗津右近ゝ栗津右衛門松平内記中村治部

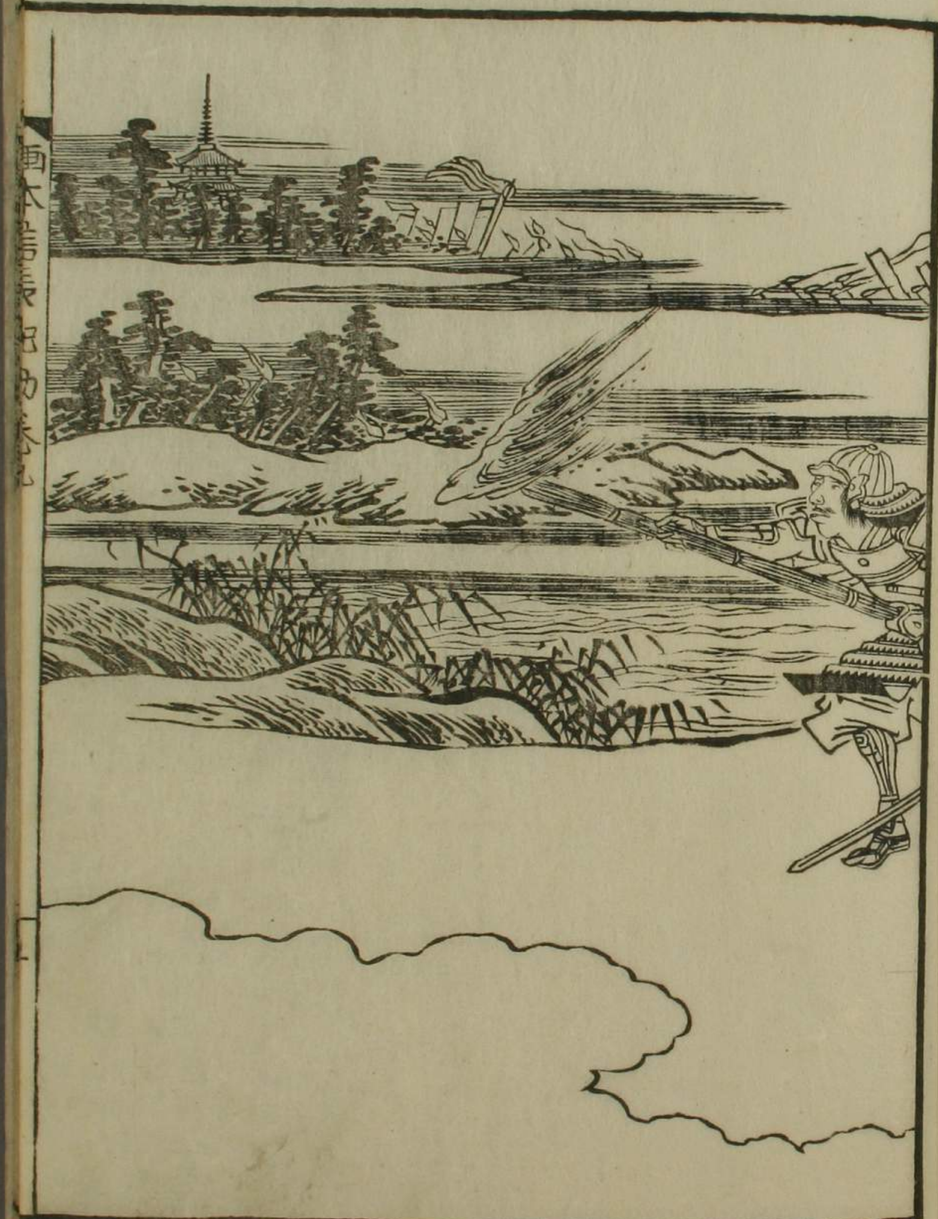
ゝ命じ数万の長松明を用ゝ焼ゝ安部神街道より東の方猪飼
地舎利ゝ栗津田辺の村ゝ堰除捐園を見ゝ計策を紛ゝ
ゝ見ゝ出ゝ又月七日の夜ゝ十五夜ゝ出ゝ引ゝ枝又ケ原の砦ゝ
計略をゝ合せ下間摂津橋本龍門大進門宮内卿二ゝ余人と
引率ゝ敵城を出ゝ天王寺の陣
を見ゝ出ゝ間をゝ詰ゝ上げゝ
ゝ海ゝ多ゝ強ゝ鉄炮の組ゝ多ゝ出ゝ打ゝ
鉄砲ゝ出ゝ多ゝ出ゝ下ゝ多ゝ
ゝ者ゝ者ゝ上ゝ騒動ゝ信盛間ゝ馬ゝ陣ゝ奉ゝ出ゝ鎗ゝ
ゝ出ゝ地ゝ出ゝ敵寺勢二ゝ余人八方ゝ元囲ゝ互ゝ捨ゝ
合ゝ戦ゝ戦ゝ時近辺ゝ陣ゝ構ゝ者ゝ大ゝ支羅


重幸
奇計
小田の
軍兵を
抑びやうん

尾右近池田丹波守松永弾正を始めとして戦もくくと馳集り信盛と
力を合せ門徒勢と退治しけれども其時だうも接合うしけれ
山の坂中より和国へ越し〳〵狼烟をあげ中光雲中へ揆側〳〵
しかるに東の方より雷鳴して数万の松明一時に焼〳〵つと押うくと聞の敵
地よりひそかより狼烟をあげて和国へ落せば猪飼野より田辺
のかたへ一面に松明と匹南の方へ押まくるれば小田勢大み
周章し又は殺害めぐ謀計に落されるぞ迂闊に戦ひのやまちなせ
そし安部野の方と南へさし戦先へと引ける門徒勢退討に
切ふとび討る者数を知らず山附伝に陣を立る明智十兵衛
光秀遥に松明の光をかく一に余人の道兵と率し戦ひを助ん
と陽向村まぐ来りしかば水津雑賀の村〳〵より多く乃出を

匹し住吉の方へ押来る光秀馬を止めて大きに笑ひ門徒の一揆京奇
兵の術と思て味方の陣〳〵を呼びやうれと覚へうり巳方の松明何十
万みつも皆讃岐の計と討て出る敵あるべしと一度のきまて續く軍
勢みなぐらに見なる敵乃ぐに実崩せと士卒とも思
て馳向むと人〳〵多く向松永弾正が軍勢斬ふ〳〵逃来るを明智
十兵衛光秀加勢とて大きに笑ひ逃る味方と引返へかけ出て
向をとれば本教寺の勢二万余りなる軍勢をまどろ六十騎引とり
う光秀勢門徒を追り返せ〳〵と呼ひ門徒勢
少し敗て寺中へ引入る光秀も追方なく天王寺へ陣して敗軍を
集めるに東西の松明次第に消て星の光はきら〳〵しきり見え
さんぎる者と思小田勢肥後とあきれまどひ諸〳〵陣取て考へ用心


光秀軍義味方の物と助く



堅固に守て久しく去ずと小田三位信長卿宣る旨三日ようの八月下旬
まぐれ十余日を経て責給へども本願寺の構堅固にして寄る落
ることなき気色なり信長ようんご退座し一さび本国へ退き来て計議と
めぐらし夷狄をとゞめ天王寺の陣を寄の久間信盛に守らせ給ふ
其後に明智光秀に命せらるる摂津の河内は稲葉伊豫守河分
口の河内城に平に賜物長柄すは荒木摂津守を守らしめ八月廿七日城
を立て本国に帰濃の岐阜城せられぬ

下辻村の討死之事

十年の秋九月中旬に成ること本願寺の河内城に籠もる事に臨
物稲葉伊豫守を初め本願寺へ軍勢をとり向け攻戦ふ事いくたび
城中強く要害に安堵の名城なれば一度も利を得ざる死傷の

者多うなんいとくも急すは責落しがたし附節を結ぶ事をもうる
ぬ諸方の附城皆承滝川の用意をうけ附も秋の来るれい
外回に兵粮を運んと河分に摂津の河内城双方や合せ二万余騎の
軍兵を率し河内の八箇所表に出て田を刈ふ元来八箇の在い
箇の在板並の在すは本願寺の門徒にくみし百姓ども敵方へ
兵粮を入せ山の雑物なるべし偽や退散せしそ儀に百姓
一揆と記し集る輩三万余人我先に地内に武い行逢武農具を打
ふりく命惜まず戦ふ事に稲葉伊豫守軍勢をひかけるに取
を討ち陽ぎうて引元りと道にまでとく退討る実に平に臨
ぐるの者に中尾橙発らの剛兵あり日天余りの大方電光のごく
打振く辞事る百姓と花に右に八雑側しまさく内に十日又人義

小田野
樓並
八ケ村ゝ
田と
刈ル

菊先

死して切立まば、いさましき勇士二騎方共一人も切立て退路を開き
て深くも門後の中に摂州板薗の庄下辻村に助らん者大力の
誉聞る者なるが大音を打て板薗四郎が死骸に抱付て
やさ〳〵き涙ぐるまひ流し合て戦ひが助が力尽絶論は
てしもの板薗四郎ひとり人〳〵なりとも板薗が番の勇士
るんぬ方をかりと投捨逃ぐひと組付て助も組討ごさん
るまとは思く弟おとく双方劣らぬ大力大兵なと踏立て煙を揚て
暫計も組合て板薗組るが〳〵短刀を引抜助が脇腹へ通せば急
不の痛をにひるまるが〳〵剛勇の者なれば此方も脇指引抜て板薗が
胸板を突貫く両人倒て痛を堪ぬ眉根を開く敷雷のとゝめ刺さ
堂に突伏く是ば拾の死骸を抱て敷味方なの恐の討死やと

者と思て恐るゝ色なく物別して稲葉平の両勢外ら稲も
立得ずして向ひ城へと引退るけ軍が働きよりく敵方へ外田させ
ざる様接戦の忠節なりとく別如と人彼門後を立ませ念れる
震慄ひ為ひ紙中下辻村の助が働き討死の死骸感歎とふ絶さう
とく感嘆を揚へ甚ふと曰く

去十八日於八間所表及一戦下辻助討死之 様忠節不
浅別而居後彼 思召被 仰付蔭言

天正二年

九月廿一日

刑部卿法橋 正秀

上使法橋

下辻助及跡目に

下辻村の
助
討
死

右の一通今も摂津下辻村釈迦寺に有せり此比石山の合戦門徒の討死数を尽し比丘人法の為に命を捨るを感じ地獄を下し場ふの数多みとつくも若に犯せる地田討死の孫と比叡辻村助ゞ孫の〻中ゟに拙ひて御所講と号毎年七月廿八日御齋御相伴を免し給ふ寛永二年講中の数多門く此講を二つゟ内七月廿八日に地田方三月廿八日に辻方とく例年中山へ集向せるの輩く人の知る所なり

本願寺領紙系國事

加賀國に去る長享二年本願寺門徒一揆とゆ〻國を攻撃政親を亡し加州一国ゟ本願寺の所領なり尚時下同薗後法橋板浦壱岐法橋両人本願寺より加賀國へ出き護代なり去る紙系の門徒多國の守護職桂田摂磨守を殺し紙系を引本願寺へ接げゃうと計せるゟ小系の朝倉ゞ家臣蓮田弥六郎信長ゟ源系し小田家の下知と孫し桂田ゟ代つて紙系の仕置を法と本願寺門徒多いよ〻〻勢り加賀の守護代下同薗後板浦壱岐ゟ講〻軍勢と接ゟ蓮田と〻ゞ本願寺の下知ゟ逆ゟ者と孫し紙系とゆ〻本願寺の外系とゟさんゟを願ふ下同板浦の両法橋大きゆ欲ひ七里三河守と〻武勇の者を大なるし紙系へさし紙〻れば加紙両國の門徒殿〻く集り其勢院ゟ六万余人元長浦の城墨坂ゟ七郎を攻殺其外河合の庄乙部勘解由左衛門ゞ被を責元其外三箇の庄ゟ朝倉孫六郎行山の芝光寺ゟ其内ゟ仏ゟ庄ゟ毛屋保ゟ助多為意く打殺〻勢ひゟ除〻蓮田弥六郎と責側さんと和田の本願寺と先陣と七里

朝倉景鏡
恐れて
辛泉寺
へ
逃る

三河守勢太ゐにて府中の城へ押よせ暫時が間に城を乗落し城将
弥六八郎を斬罪し其勢ひ実に利刀の竹を破るに似たり且唱る所ハ
此の国主朝倉義景ハ本願寺の縁者なれバ義景が為に仇を報ひ
信長一味の凶徒を鏖して宗旨の為に法恩を謝んと爰に相ひて集
る門徒等日毎に多く小田方の者ハ恐をなし嵐のごとく逃まどへ
寔に大野郡の山の城主朝倉式部大夫景鏡ハ主人義景を討て信
長に降参せし者なれバ此ことを聞て大きに恐れ夜中妻子を引連
平泉寺に逃れ衆徒をたのんで隠れ居たり門徒等是を聞てさら
ば平泉寺を責て景鏡が首を刎よとて一万余人の門徒平泉寺を
十重廿重に取囲み揉立て責たりける平泉寺の衆徒等も遁れ
ぬ所なりと覚悟して三千余人籠城し式部大夫に軍配させ防戦又

に蹂躙せられ寄手の大勢責たてけれど見へざるが中々力及バせね味方乃
人数を損ぜじと城に籠して柵を結ひ芝土を築廻ひ陣を堅
て二月より四月まで日毎に仕寄戦へども更に恐るべき軍もなし大ゐ七里
三河守士卒に下知して平泉寺の西に当て村岡山といふ山あり此所に
城を構へ敵城の虚実を見透しなバ味方の為に大利あらんとて又百余
人の人夫を入れて村岡山に城の普請をはじめたる平泉寺の衆徒等是を
見てあの山に城を築せなば当城忽ち危ふからん普請成就せざる
内に責寄せ追ちらせよと若き雄の若大衆我も〱と馳出て村
岡山の門徒等と火花をちらして戦ひける此旨寄手の一揆和田本覚
寺つゞく合戦のさまを見て七里三河守に注進しけるは今村岡
山の砦を築せずと城中の大衆悉く出て合戦に定めて城は無勢

玄旨泉寺
高城
南无不動明王

ゐるべし此度蜜事して責立ゐるべば落城せんゐ疑ひなし七里見を
守く左とはじ別本光寺と先陣とし三河守い後陣ゐ備へ勢
九二万斗平泉寺の西門より五二五三ゐ責とれいろふる遠浅此
城中ゐ猿ゐ着い老僧雅児唱食ゐ勢鄙ゐ弱き者ばかり何の用ゐも
ゐく守ゐ居ゐれば猿ゐ防ぎ切ゐる者もゐく忽西門打破ゐく寄ゐ乃
大勢孔ゐへゐや火をかけて焼ゐる哀むべし泰澄大師の開基三里已
面の伽藍七堂伽藍庁附の烟と立ゐり只一堆の赤土となるい浦ま
しかりしゐさまゐ見ゐゐゐく村岡ゐ人白ひ戦ひし無徒多勢のおゐく
級軍しさ〜もの哀傷大坊ゐ多門徒乃百姓ゐ踏倒さん美州塩山
加ゐて首と刎らゐ遊ゐ着い稀ゐ名ゐ朝倉武部ゐ家明ゐ袋田村
の郷民宝ゐゐ着ゐ首と斬ゐぬれば本願寺の勢ひ益さかんゐ

城為一国悪〜石仏となり摂州石山ゐ大所の専修寺奪打ゐ嶽ゐ和田の本光寺湯尾峠ゐ七里三河
守と綸らせ小田の押へとし城為の手後代い下間蓮淑法橋加賀
の政怒い坂浦寺波法橋ゐまりせゐゐ小国都て本願寺の領国ゐり
其勢ひ激ゐ盛ゐりゐ〜ぞ見ゐゐ

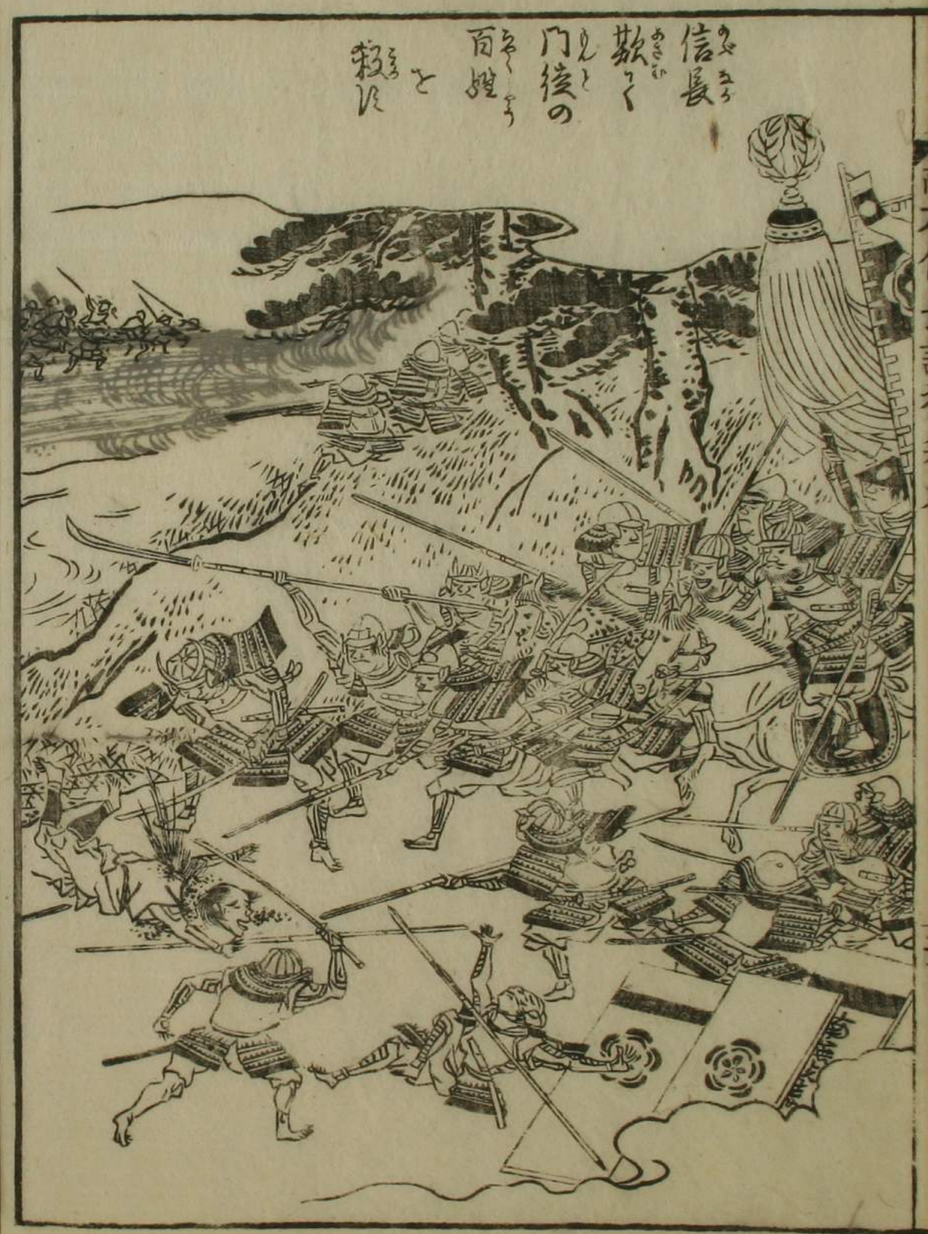
信長御長男一揆退治之事

勢州長島ゐは長島寺を大将とし数万の門徒籠城し信長両度
数回ありしといへども〜ゐ斬ゐ抜彩三郎氏家卜全の勇士を
討死ぬ信長ゐ怒ゐ軍ゐ恐ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ猛威ゐ震ひ
ゐ天正二年の秋信長ゐ長島ゐ討平んとて其勢九万余人伊
勢路ゐとして押ゐ加ゐにへ多久同信盛柴田勝家稲葉一

松の浦
合戦

敵蜂屋般若等押寄ける小松の本の陣よりして門徒等相支へ鉄炮
をはなつ事雨のごとし小田勢も負死人数多ありけれども事ともせず
せず大河を渡し槍を入て突崩し門徒等数百人斬捨勢ひを添し
数刻に信長後陣の大軍を従へ進み長島の城を雲霞のごとく取
巻ける一揆方の附城篠橋大鳥居の両所を小田大隅守氏家左京
亮稲葉伊賀守飯沼勘平等軍勢を以て取囲み石火矢にて打崩し
さんざんに攻立ければ城に籠りし門徒等案に相違し降参せんと
乞ども信長更に許し給はず願證寺門徒の凡黨
悉く討殺せられ一度二度三度に責入両城の男女一千余人切殺し其勢
長島に巻よせ昼夜の分ちもなく三日が間水ももらさじと責立
ければ城中大きに疲れ落しを大ねは長円寺の役者を以て信長へ申

けるは我々流石に力盡て落城近く候へば元来城中の男女老若信長
御へ對し弓引は不届なれども是は一揆の張本一人が語らひに應じ是非
の弁へもなく前後の分も無御籠城致せし者どもなれば哀を
寛仁の御計ひを以て拙僧等が大ね分の者三百人自害仕其余
の者どもを助命せられなば生々世々の仁恩忘るまじく斯なべからずと
謹で申ければ信長聞て長円寺が申条神妙なり生害を遂げ
首を出陣へ送るべし城中の男女助命の儀は遠からず沙汰に及ぶべしと申渡
されければ役者城中にかへり斯くの次第物語りければ長円寺を始め
人皆信長を鬼神のごとく恐ろしけれども本意に及ばざれば仁恵の心ある
よしなれば今城中の男女悉く命を助け故郷へ返さるゝ事一方ならず
ぬ恩ぞかしと喜びつゝ皆々自害して死にける


信長
敷く
門後の
百雄
を
救ひ

其余大ぜいなりは俗に桜井寺俗に九郎左衛門尉
後撰切て落ふ一撰の者詰腹を流し歌ひ踊りつゝ
紙に人の首を先に立てさげ撰門を開き二万の余り門後の田畑
もくこと群り出南とさして走り去る信長遠てより堤のごとく大勢
と堪伏せしめ又鉄の弓鉄砲を押ならべ一度に放せば
逃惑ひ門後の百姓ども者に應じて三の余人ひさくと打殺る
先を見て逃る門後名大きふ蛭り原道の信長易々の合戦に得
るさで欺く敗さんとやとても如くても記もべき命信長に喰付て
は眼をたゝせやと覓覓の者ども二の余人信長が陣の中へ面も
ふらで切入て命をぎりに戦ひ名る元来素肌の百姓なれども記を
一筋に覓めたれが其辨先に出り、小田の軍兵はしらひ
三丁引さり名るされども小田方大軍なれば八方より推包む余さ
じりのと死もあひ二時に戦ひ敗方討死を数を知らず中にも
信長の叔父小田大隅守信廣は一族津田市令助は仙に代は又六
郎は孫十郎小田平左衛門弟掃の勇士赤見左衛門佐佐治八郎
坂井七郎左衛門を始め名々人〻三千余人討死雑兵七百余人
討死さり一揆方も悪く討死し後に三百余人の討死され一方を
切ぬけ又六丁も引返ぬらんとそこに不敵に鞭毛なる馬に乗者
只一騎掃よりふぐ返りけ流に同道づれ大きなる兵に討
を殺ひ津田市令助信盛の乳母人に激三郎治郎法長くと者
なり討死てき人の御供やと止まくと呼まはる馬乗なるち
面もふらで一揆の中へ切入さり切伏されと数く

の歌を切さらに寸陰くゝよりあそさうぐう宴に天晴の剽の指
うゝと歌を味方を感じ〻家を抑ひく長浦城に一揆悪く
静寂さうに信長刈瀧川一益をゝて長浦城守らせ十月又月軍
勢をまどゝ本國美濃の帰城ありける

繪本拾遺信長記初篇巻之九終